

オーレル・スタイン

——東西交渉史研究に

おけるかれの業績——

岡 崎 敬

一

一九世紀の後半より二

十世紀の初頭にかけて、
中国新疆省を中心とする
中央アジアが未だ知ら
れざる地域としてのこ
されていた。この地域に
とりくんだ各国の多くの
探検家の中で全生涯をそ
の探検調査にささげたス
ヴェン・ヘディン (Sven
Hedin) とオーレル・スタ
イン (Sir Aurel Stein) の業

とざされたのちも、乾燥アジアのすみずみに従者ととも旅をつづ
け、アフガニスタンの首都カーブルに最後の息をひきとつたのであ
る。

昨年 (一九五五年) カーブルに滞在中、木原均博士をはじめ探検
隊員全員、郊外の外人墓地にあるスタインの墓にもうでた。十字架
の下に彼はねむっている。われわれは大理石の墓誌銘に次の文字を
よむことができた。

× × ×

MARK AUREL STEIN

OF THE INDIAN ARCHAEOLOGICAL SURVEY

SCHOLOR EXPLORER AUTHOR

BY HIS ARDUOUS JOURNEYS IN

INDIA CHINESE TURKESTAN PERSIA AND IRAQ

HE ENLARGED THE BOUNDS OF KNOWLEDGE

BORN AT BUDAPEST 26 NOVEMBER 1862

HE BECAME AN ENGLISH CITIZEN IN 1904

HE DIED AT KABUL 26 OCTOBER 1943

績はその範囲の広汎なることにおいて、また調査の精到なることにお
いて、またこの地域における問題の解決と新たな提出においてわ
すれることのできないものがある。スヴェン・ヘディンははじめは
地理学者として探検をはじめ、晩年は中国西北考察団 (Sino-Swedish
Expedition) の組織者として縦横な活躍をしたのに対し、スタイン
は終始沙漠にうもれた古代遺跡をもとめて新疆省の調査が西洋人に

A MAN GREATLY BELOVED

《マルク・オーレル・スタイン

インド考古調査局長

学者、探検家にして著作家

インド・中国領トルキスタン・ペルシア・イラク

の困難なる旅行により知識の境域を

おしひろげたり

一八六二年十二月二十六日ブタベストに生れ

一九〇四年英国市民となる

一九四三年十月二十六日カーブルに歿す

(人々より) もつとも愛せられたる人

いましばらくスタインの足跡をかへりみ、ことに晩年の調査について紹介することにしたい。

*スタインについては榎一雄氏「アウレル・スタイン小伝」(東

洋学報第三十三卷第一号、昭和二十五年)があり、*Journal of Royal Asiatic Society* 1944, 1946 中の追悼録にもとずいて、その小伝と著作目録をかいとおられる。梅原末治博士の「西域探検の学者達」(スタイン卿のことども)知慧四、昭和二十一年)に日本をおとずれたスタインの姿をうつしてゐる。本稿の第二章はオルダム氏 (C. E. A. W. Oldham) が *British Academy* のために編んだ追悼録に負うところが多い。

二

スタインは一八六二年十月二十六日ハンガリーの首都ブタベストで、父ナタン (Nathan) と母アンナ (Anna) の二男として生れた。長男も長女も成人したあとで両親の寵愛を一身にあつめていたが、母方の叔父でイグナス・ヒルシュラー (Ignaz Hirschler) という学者があり、その訓導をうけた。十歳の時ドイツのドレスデンに学び、ここでギリシア、ラテン、英、仏の各言語を習得した。ドレスデンの時代、アレキサンダーの東方遠征のものがたりにいたく心をひかれたという。その後ウィーン、ライプチヒ、チュービンゲンの大学に学び、一八八四年イギリスに来てオックスフォード、ロンドン大学の門をくぐった。一八八五年ブタベストにかえつて測量術をまなんだ。一八八六年再びロンドンに來り、大英博物館などにおける彼の勉強はめざましかった。ハンガリーは地勢的に民族的に東洋に



イランにおけるスタイン探検隊行程地図 (1932—1936)

近く、アルミヌス・ヴァムベリー (Arminius Vambéry) やチョーマ・デ・ケレス (Csoma de Kőrös) のようなすぐれた東洋学者がでている。彼も次第に東洋学に対する眼がひらかれていったが、イギリスはあたかもヴィクトリア女王の盛時にあたり、能力ある人材をもとめている。宰相ジスレリーがユダヤ人出身であつたが如く、イギリスこそその能力を発揮する可能性のあることを知つたのであらう。ロンドンではヌール (Sir Henry Yule) やローリンソン (Sir H. Rawlinson) の知遇を得た。ヌールは “Cathay and the way thither” やルロ・ボロの訳註 “The Book of Sir Marco Polo” (いずれも後にコルディエ H. Cordier と共著で版を重ねた) をもつて知られ、ローリンソンは「バクトリア」(Bactria 1912) の著者として彼にヘレニズム東伝の興味を伝えた。一八八八年ローリンソンの推輓によつてインド・ラホール (現在パキスタン) の東洋学校の校長としてはじめてインドに赴任するのである。

かれは土地の言語をこつこつと学び、これに通暁していった。一八九二・一九〇〇年には「カシミール

王年代記」(Kalliana's Rajatarangini) の翻訳を、一八九九年には「カシミール古代地誌」(Ancient geography of Kashmir) を刊行している。しかしながら彼の仕事は文字言語の研究にとどまらなかった。一八九一年バワー大尉 (Cap. H. Power) がクチヤから文書をもち出して以来、俄然世界の東洋学者の注意をひいていた中央アジア・中国新疆省に眼をそそいだのである。一八九九年ローマにおける国際東洋学会議でロシアのラドロフ (W. Radloff) が中央アジア探検に関する国際的な機関を提唱したが、このころからイギリス、フランス、ドイツ、ロシア、スエーデンをはじめ各国の探検隊が活潑な行動を開始し、わが日本も大谷探検隊がその翼尾に附したのである。スタインはヘルン (A. F. R. Hoernle) 教授あつせんのもとにインド政庁を動かし、一九〇〇年より翌年にかけて第一回の新疆省の調査をおこなった。この時はギルギット (昨年の京都大学探検隊のカラコラム支隊はここから氷河地帯に行動をおこした) よりバミールをこえ、カシユガルよりホータン (Khotan) 附近のいわゆる天山南道の遺跡を調査した。ここで砂にうもれた住居址や廃寺址を発掘、塑造の仏像、木彫、陶器、貨幣、また漢文、カロスチ文でかかれた木簡を発見している。これらの報告は“*Ancient Khotan*” (1907) としてまとめられている。

一九〇六年から一九〇八年にかけて第二回の探検をおこなった。

ベシャワールよりバミールをこえ、カシユガルより再び南道にむかい、前回調査したヨートカン (Yoktan)・ダンドンウィリク (Dandun olik) などのホータン諸遺跡から東進してミラーン (Miran) の古寺ではストゥーバのまわりから翼をもつた天使・飛天のフレスコ壁画を発見した。またヘディンの報告したロブ・ノール周辺のローラン (Louan) を探訪、さらに東して一九〇七年三月敦煌にいたった。県城の東南三〇キロ鳴沙山には敦煌千仏洞がある。一八八九年ハンガリーの地質学者ロッツ (L. de Loezy) がここをたずね、スタインに調査の必要を説いていたのである。石窟寺院をしらべているうちに、この寺僧王道士がある石窟 (スタインの第一洞) ベリオの第百六十三洞) から仏画、仏典や古文書類をもち出したことをつきとめ、その多くを得てひきあげた。スタインの資料はのちに大英博物館に保管せられている。丁度このころウルムチにあつたベリオ教授 (P. Pelliot) らのフランス探検隊は、このことをきいてただちに敦煌にかけつけ、残りの文書をベリオは得意な語学力を駆使してよりわけ北京經由フランスにもたらした。これはベリーのフランス国立図書館 (Bibliothèque Nationale) に保管せられ、わが那波利貞博士のうつしこられたものはこれに属する。こうした敦煌文書の流出は中国人を刺激し、清朝政府はただちに保存のことを指令、のこりの分を北京にうつしたのである。明治四十三年内藤湖南、狩野

君山、小川琢治博士の一行がその調査に北京に出張、勃興期にあった日本の東洋学に多くの刺激をあたえたのである。京都の東洋学は一時敦煌学派という名でよばれたそうであるが、この間の事情は石浜純太郎先生の「敦煌石室の遺書」(『東洋学の話』昭和十八年)にくわしい。スタインは敦煌近郊の漢代の長城 Limes を調査したが、前漢末より後漢にかけてのもので、辺境兵士の生活を示す遺物とともに当時の文書資料である木簡が多数発見せられた。シャヴァンヌ (E. Chavannes) がこの木簡を訳註(一九一三年に "Les documents chinois decouverts par Aurel Stein dans les Sables du Turkestan" Oxford として刊行した)。

敦煌よりひきかえしたスタインは天山北道をとおり、カラコラム山脈の峻険をこえて一九〇八年インドに帰着した。"Ruins of Desert Cathay" Vol I-II, 1912 はその紀行文、"Sindia," Vol I-V, 1921 は正式の報告書である。

この後しばらくスタインはペシヤワル近郊のガンダーラ仏教遺跡の調査にたがっていた。一九一一年より一二年にはサフリバフロール (Sahrībhāl) を、一九一二から一三年にかけてはハーグリーズ (H. Hargreaves) とともにタクティ・バハイ (Takhti-Bahi) やサフリ・バフロールの発掘をおこなっている。昨年岩村忍教授とともにペシヤワル博物館をおとつた時、館長シャクール氏 (Mr.

Ashtar) はわれわれのためにタクティ・バハイ、チャルサダなどの遺跡の案内をしてくれられたが、シャクール氏は少年時代にスタインより A B C よりおしえられたと語っていた。

一九一三年より一六年にわたつて第三回の新疆省の調査にのぼつた。この時は従来ヨーロッパ人のこえたことのなかつたダレルとタシギル (Darel, Tangir) の丘陵地帯よりバミールをこえ、前二回と同様、道を南道にとり、ホータン、ミラーン、ローランへとすすんでいった。ローランでは漢代の墳墓をみつけ、漢代の絹織物を採集した。敦煌千仏洞も再び調査を行い、又敦煌近傍の漢長城より再び木簡をはりだしている。さらにエチナ河を下つて西夏の都城址カラ・ホト (Kara Khoṭo) に足をのぼした。ここはかつてカズロフ探検隊が発掘をおこなつたことがあるが、スタインも都城の測量ならびに一部発掘をおこなっている。かえりにはトゥルフアン盆地にて、カラ・ホージャ (Kara-Khoja) に都城をさぐり、アスターナ (Asṭāna) 古墳墓群を発掘した。カラ・ホージャは高昌国の首都、ウィグル時代にまで用いられた。アスターナは六朝より唐代にかけての高昌国の墳墓であり、ともに中国的色彩をつよくもっているが、隋より初唐の墳墓よりササン・ペルシアの絹織物や貨幣が出土しており、東西交渉の重要な資料を提供したのである。

ここから天山北道を経て、露領トルキスタンのサマルカンドに出、

ベルシア領バルチスタンをへて、インドにかえっている。

第三回探検において採集した敦煌長城出土木簡やアスターナ文書類はレスネロ教授 (H. Maspéro) が整理し "Les documents découverts par Aurel Stein" London, 1953, として公けにした。正式の報告書は "Innermost Asia" Vol I-IV 1928 としてまとめられ、第一回より第三回までの調査の概略はボストンの Lowell Institute での講義をもととして "On Ancient Central-Asian Tracks" 1933 として公刊されている。

かれの探検の経過をみると新疆省、甘肅省の全域にまたがっているが、ルコック (A. von Lecoq) やグリュンヴェーデル (A. Grünwedel) のドイツ探検隊がクチャやトゥルファンのいわゆる北道を中心としたのに対し、スタインはホータンより逐次南道の遺跡の調査をすすめ敦煌に出、その後カラホト、トゥルファン盆地へと展開していった様が看取せられる。

一九三〇年スタインは日本をおとすれ、四月には京都大学をもたずねている。その後中国にわたり、北京より第四次の探検を開始したが、新疆省の政治的情勢のため、国民政府の許可を得られず、中途よりひきかえざるを得なかつた。一九二七年開始されたヘディンの西北科学考察団 (Sino-swedish Expedition) の調査には中国側

から黄文弼氏が参加、トゥルファンならびにローランの調査を行い、またベルクマン氏 (F. Bergman) の一行はエチナ河にそう漢代長城より木簡多数を発見した。いわゆる居延漢簡である。いずれもある意味でスタインの調査の延長であるが、その後はあまり考古学的調査はなされず、第二次大戦に入るのである。中華人民共和国の成立以来、新疆省は新中国の一部に入り、新しいフロンティアとなつた。西域考古学は中国学者の新しい舞台である。敦煌石窟も中国美術院の手によつて堅実な調査がつづけられている。スタインもまたもつて瞑すべきであらう。

三

新疆省が西洋学者の調査に門を鎖したあと、スタインは西南アジアに調査の足をのばし、一九三二年より三六年にわたつて四回にわたつてイランの調査を行い、一九三八年より三九年にはシリア、ヨルダンよりイラクにいたるローマ長城の調査を行つた。このうちイランの調査についてはその報告が刊行されているにもかかわらず、日本では従来あまり知られていないので、ここにその概要をうかがうことにしたい。

イランの考古学的遺跡は一八四〇年より四三年にいたるフランダン (Eugène Flaudin) とノット (Pascal Coote) の二人がヘルセポリ

スをはじめイランの各地をあるいて、その報告を公けにしてからひるくヨーロッパに知られるようになった。フランス学者によつて調査団がおかれ、デュラフォア (M. Dieulafoy) モルガン (J. de Morgan) はスーサをはじめとする諸遺跡の調査を活躍に行つたが、今世紀初頭よりドイツのザーレ (F. Sarre) ヘルツフェルト (E. Herzfeld) が加つた。一九二六年レーザ・シャヤーが即位するや、政治文化の各方面に近代化をすすめた。従来の如き掠奪的発掘を禁止し、テヘラン博物館を創設して外国学者の発掘はむしろ奨励しながら、その出土品は原則としてここにおさめる政策をとつたのである。一九三〇年代はフランスのほか、アメリカもこれに参加、ヘルツフェルト、シュミット教授もドイツよりアメリカ側に加はり、ダムガンやベルセボリスの調査を行つたのである。スヴェン・ヘディンの探検隊 (Sino-swedish expedition) もトルコマン平原に接するグルガン近郊の遺跡の発掘へと進出した。スタインはベルシア湾岸にそい、イラン高原の南より西への縁辺部にそつてウルミア湖 (Lake Urmia) にぬけたので、インドにいたるイギリスの生命線地帯の調査であつたといえる。

第一回の調査は一九三二年一月四日インド領 (現在パキスタン領) パルチスタンのグアドゥル (Gardar) に上陸、ここより行動をおこし、ベルシア領 (一九三五年ベルシアはイランと国号を改め

た) パルチスタンに入つた。ダンバ・クワー (Damba-Kōn) の墳墓ではバルチア代の貨幣 (Sattucos 77-70 B. C.) の出土から、その年代を想定、カラト・イ・シャムシッド (Qalat-i-Jamshid) ではクーフィック文字のある三彩手の陶器を発見しているが、ほかにホブソン (R. L. Hobson) によつて中国陶磁のあることを指摘している。バンブール (Bampur) のフラブ (Khurab) では彩色土器をふくむ墳墓を発見した。カヌー (Kahnū) 附近で遊牧民アフシャール族 (Afsār) がジルフトの地帯に冬の放牧するのを目撃している。ジルフトの耕地帯の西北にシャール・イ・ダキアヌス (Shahr-i-Dakiānus) とよぶ遺跡がある。アラブ地理学者イスタフリ (Istakhrī) は「ホラサンとシスタンをもむすぶ重要な市場」のあることをしるし、ムカダシ (Mukaddasi) も「果物と穀物にとむ地方都市としてもつとも楽しいところ」であるとのべている。マルコ・ポーロもその産物として「なつめ椰子、林檎、ビスタシオ」などをあげ「かつては大きく且つ驚異すべきほど立派であつた都」というカマジ (Candī) がこれにあてられる。モロコ侵入後はひどく変りはてて、通行の不便なことをマルコ・ポーロは記している。スタインはここで四十一枚の銅貨、二枚の銀貨を採集しているが、銅貨三十二枚と銀貨一枚はアッバス朝初期、(七五〇—八五〇) 一枚はアル・ワティク (Al-Watīk 842) 代のものである。銅貨三枚は十二・三世のもの、銀貨一

枚は十四世紀のジャライリッド朝 (Jaraid)、銅貨一枚はチムール朝のものである。ほぼかつてさかえた時期が想定せられる。

スタインはジルフトよりバムに出、四月二三日バムからケルマンに出た。夏季は行動不能であるため、一度ロンドンにかえり、十一月再びケルマンより行動をおこした。これから冬の間ペルシア湾にそつて西行し、ブシル港にいたるのである。

先づケルマンより南下、ミナブ (Minab) をおとずれた。ここは古の港ホルムズである。現在のミナブは昔日のおもかげは全くみられない。アブルフェダ (Abulfeda) やイブン・バトゥータ (Ibn Battuta) によると、モウコ族の侵入後は十三世紀末葉ジャールン (Jarun) もしくはザールン (Zarun) とよばれていた新しいホルムズ島にうつつたのである。このミナブの西には東洋への貿易船がうかんでいた。マルコ・ポーロも「二日の旅の終りに大洋の海がある。そして岸に港のあるクルモスという都がある。商人はインディーから船に乗つてここに來り、すべての香料と宝石と真珠と絹と金糸の布地と象牙と多くの物を持つて来る。そしてこの都で彼等はそれらを他の人々に売るのである。それらの品物を全世界に運び、そして他の人々に売る。それは大なる貿易の都」であるといつてゐる。岸に港があるというが、ミナブの西南、海岸にちかいカラトゥン (Karatum) よりスタインは中国陶磁を多数採集し、西暦一一二一年より一九年

間の製作になる一枚の中国銅貨 (政和通宝か) をひろつたことを記し、さらに近くのブルチック (Burchuk) ではサマン朝の銅貨 (十世紀) と中国陶磁片を採集したことを記している。

このホルムズという名はネアルコス (Neachos) のひきいたアレキサンダーの艦隊についてアリアン (Arian) の *“Indike”* 中に「艦隊はアナミス河口に碇泊した。その土地はハルモゼイア Hamozeia とよばれる。あかるく肥沃な土地ではあるが、オリイヴはそだたない。人々は苦勞のあとであつたので上陸して、よろこび楽しんだ。」とほしてゐる。アナミス河はミナブ河と考えられ、ミナブのホルムズをさしたものと推定している。

新しいホルムズはバンドル・アッバス (現在はここに港がある) の沖にある島の名である。ポルトガル人がここに上陸して、城砦をかまえ、一五〇七年より一六二二年までこれを占領してゐた。シャール・アッバスの治世、一六二二年の春、ペルシアの陸とイギリスの海よりする攻撃により、ポルトガルはここを撤退した。新旧ホルムズともに東洋貿易港としてペルシア港の咽喉をやく重要な拠点である。このホルムズには陶磁の破片が一面に散乱しており、その大部分は明らかに中国製品であるとスタインは記している。

十二月十六日バンドル・アッバスを出発、ペルシア湾にそつてすみ、リンゲをへてタヒリ (Tahir) に到つた。タヒリ村の西に一

マイル半にわたつて古のシーラフ港 (Sud) の廃墟がある。シーラフは中世におけるペルシア湾における東洋貿易港で、八五一年にできたつたえるアラビア商人の見聞記『中国印度航海誌』にも航海の起点がシーラフであつたことを記し、また同じく見聞録をのこしたアブ・ザイド・アル・ハサン (Abu Zayd al-Hasan) (九一六頃) もシーラフの人である。(Voyage du marchand Arabe Suleyman en Inde et en Chine rédigé en 851, suivi de Remarques Abu Zayd Hasan vers 916, traduit par Gabriel Ferrand. Paris 1922.) イスタフリも「シラズと同じ位の大きさの町でザンジバルよりチークなどの木材を建築用として輸入した」ことを記しているが、また「国中でもつともあつてい港」であると附記するのかわすれていない。九七七年の地震後急速に衰微し、一三世紀ヤクトの記すところではシーラフの人はカイス島 (Qas) にうつっている。スタインはここで住居址、墳墓やモスクのあとをたずねている。

ここからイラン高原への斜面をのぼり、ガレダール (Galdar) にいたる。このあたりではカシユカイ (Qashqai) 遊牧民の設営をみている。ハラジ (Haraj) では彩色土器の遺蹟を発掘した。その後再びペルシア湾にそつて三月二十一日ブシル港 (Bustine) に到着した。ブシル港は第二次大戦前までバスラとともにペルシヤ湾のもつとも重要な港であつたが、ホーラムシャールに港がつくられ、テ

ヘテンとの間に鉄道が設けられるに至り、急激に淋れている。第一船がつかなくなつたのみならず、各国の商社もホーラムシャール (Khorasahr) にうつり、ブシルの商人もホラムシャールやテヘランに移らざるを得なかつた。昨年九月われわれがシラズからブシルについた時は満月の夜であつた。港にならんだ商館も空屋が多く、煉瓦の壁のくずれかけたものが少くなかつた。しかしおかげをもつて空屋となつた海岸の瀟洒なハウスに若い中学の先生と警官の友人同志が夏中とまりこんでいるのに会い、手厚いもてなしをうけたことをわすれることができない。

ペルシア湾の港については大正五年七月桑原隲蔵博士が「波斯湾の東洋貿易港に就て」という論文を『芸文』誌上にかかれていた。アラビア文献を中国側の記載と対照、シーラフのことにもふれておられる。シーラフがおとろえるとキシユがこれにかはり、その後ホルムズに繁栄がうつつた。イギリスの中東経営の間、ブシル港が第二次大戦まで用いられたが、いまではホラムシャールである。

スタインはペルシア湾の遺蹟を明らかにしたが、中国よりもたらされた遺物がすくなくらず採集されていることは東西交渉史上、考古学的遺物の面から考察をすすめるのであつて、今後さらに調査をつづける必要があると考えられる。

四

一九三四年スタインはシラズ東南方のファルス (Fars) 地方の調査をおこなった。十一月二十一日シラズを出発、フィルザバード、ファサ、サルヴィスタン、ダラブをへて、ニリズ湖を一巡、バサルガードに出、翌年五月十一日ベルセポリスに到着した。当時ベルセポリスはヘルツフェルド教授が調査をおこなっていた。ファルスのササン代の遺跡はすでに知られていたが、スタインは主として彩文土器関係の遺跡を多く検出した。ファサのタル・イ・ゾハク (Tardizohak) は縦横九〇—一六〇ヤードの土壘や溝にかまれた遺跡で、試掘の結果をみると釉をもった土器片が多数出土している。ここで土民の採集したものをみるとハルン・アル・ラシッド (Harun al-Rashid A. D. 803) の銀貨一枚をのぞけばイルカン代の銅貨が多く、この遺跡の西南隅の墓石に回暦七三五年 (753 A. H.—A. D. 1354) の銘のあるところからみて、ほぼ時代が一致すると考えられる。

なほこの村から得た資料のなかにアフロディテをしめす大理石の婦人頭像がある。いうまでもなくヘレニスティックな作品であるが、"Late Greek Sculpture" の著者ローレンス (A. W. Lawrence) のみるところでは小アジアで紀元前三世紀から三世紀の間につくられたものであらうという。

この翌一九三五年から三十六年にかけてはシラズからイラン高原の西南部の山岳地帯をぬけ、ウルミヤ湖に出る大旅行をおこなった。十一月七日シラズより西へスーサにむけて出発した。この道はアレキサンダーがスーサよりベルセポリスへむかつた道であり、歴史家アリアン (Arian) クルチウス (Curtius) ディオドロス (Diodorus) の記載を参考にしながら「ペルシアの門」 (Persian Gate) をこえ、アルダカンよりバシュトにてベーベハンにぬける。デー・イ・ナウ (Deh-Nau) のダー・ウ・ドホタル (Dar-udhar) の崖墓をたずねた。これはイオニア式の柱頭で崖墓の入口をかざっており、アケメネス代のものと考えられる。

またこの道はササン代にはファルスから両河の地帯に出る道でもあつた。この道にそつてササン代の石橋がつくられた。ブリ・イ・ブリン (Bur-i-brin) ハイラバード (Khatatad) では石橋を調査、タシヤンではササン代の建築址を見た。タン・イ・サルワック (Tang-i-Sarvak) ではササン代の石の浮彫像を調査した。

マラミールの北、シャーム (Shami) にバルチャ時代の神殿を発見し、同代の青銅像や大理石像をみつけた。このうち最大のもののは現在テヘラン博物館に所蔵されている青銅貴人像で、高さ一四センチ、堂々たる作品である。ここからマスジッド・イ・スレイマン (Masjid-i-Sulaiman) にでた。マスジッド・イ・スレイマンとい

うのは「ソロモンのモスク」の意味で、アケメネス朝以前の建築址がのこっている。ここはアングロ・イラニアン石油会社の油田地帯となつてゐる。ここからアワズ、ディズフルに出、二月十七日スーサをおとすれた。スーサは新石器時代以降各代の遺跡をふくみ、モルガン以来フランス考古学者常駐のため「スーサの城」：“Château de Suse” が丘の上にたつてゐる。この時の団長マツクナム (M. de Macquenam) 教授にむかえられ、ふかい感銘を受けた。私も昨年テヘランよりホラムシャーリに出る途次、スーサをおとすれ、現在の隊長ギルシュマン教授 (R. Ghisshman) 夫妻にむかえられ、その調査を伺うことができた。二月二十一日にはスタインはさらにルリスタンへの調査に出発する。カルヘ河をさかのぼつてルリスタン (Luristan) に入る。ザクロス山間のルリスタンから動物裝飾文様ゆたかな青銅器が多数流出して世界の学者の視聴をあつめたが、困難な山間部のことで充分なしらべがなかつた。シュミット (E. Schmidt) がシカゴ大学の東洋学研究所 (Oriental Institute) への仕事としてここに入つてゐる。スタインはこれを南から縦断しようとしたのである。一九三五年から三六年になるとこのあたりにもレーザ・シャーの新王権の威令も徹底して、むしろ順調にすすめられた。ルミシヤカン (Rumishkan) フライラーン (Fulaian) ギライラン (Giraiyan) 近傍ではかなりの遺跡を発見してゐる。スタインによればルリスタ

ンは比較的多雨で灌漑農業のできることを指摘し、ルリスタン青銅器は完全な遊牧民の所産になることに疑問をさしはさみ、遺物の少いのは農民の墓で、豪華な青銅器を副葬するものは征服者である遊牧民の墓であらうとした。

スタインのイランにおける調査区域はイラン高原が海岸もしくは平原にむかうところであり、現在もその高低による温度の差を利用して遊牧民は季節的移動を行うのが常である。北からクルド (Kurd) ルール (Lur) バフチャリ (Bakhtiari) カシュカイ (Qashgai) アイナル (Ainlu) アフシャーリ (Ashari) などの遊牧もしくは半遊牧民のうごきはその調査記にしはしばでてくる。中国の北辺にも綏遠青銅器もしくはオールドス・ブロンズなる名称をもつ動物裝飾ゆたかな青銅器の一群がある。この地帯も遊牧民と農民の接触地帯であり、ルリスタンにおけるスタインの解釈は重要なヒントになるであらう。ケルマンシャーからサギズをへて、ウルミヤ湖 (レザイエ湖 Rezai) のほとりに出た。ハサンルー遺跡の発掘はこの時で、土器のほかに青銅製品、青銅の地金や鋳型が出土した。ここから出た印章をガッド氏 (G. J. Gadd) はほぼ紀元前五世紀にあててゐる。パーソン・ブラウン (B. Brown) が一九四八年におこなつたアゼルバイジャンの調査はこのあとをうけたものである。(B. Brown; Excavation in Azerbaijan 1948. London, 1961)

以上紹介したイランにおける調査は

“Archaeological Reconnaissances in North-western India and South-western Iran” 1937.

“An archaeological Tour in the Ancient Persia” IRAQ, Vol. III, Part 2, Autumn, 1936.

“Old Routes of Western Iran”, 1940.

の三冊にまとめられて報告されている。

五

一九四三年十月十三日スタインはペシャワールからアフガニスタンのカーブルに到着した。二十一日カーブル博物館をたずね、そこでひいた風邪がもとで、二十六日世をさつた。最後のことは「自分はすばらしい生涯をすごした。六十年間おとずれたいとおもつていたアフガニスタンで終りをとけることほど楽しいことはない」

日本流にかぞえて八十二才、終せめとることなく、調査の旅にその全生涯をささげたのである。彼は大英帝国の最盛期に、その能力をふるい得たわけであるが、その資料を決して独占することがなかった。この点はベリオ教授と対照的である。資料はすべて当時の学界に開放し、必ず旅行記と学術報告を刊行して世界に問うたのである。彼の考古学的素養はベトリ教授 (F. Petrie) 教授に負うものである事を彼自身のべている。現在では敦煌石窟にしてもその他の

遺跡にしてもつと精密な基礎調査が要求されている時代であるが、かれの調査はあたうる限り精密をきわめ、必ず測図を附して後の調査に備えている事は感謝されてよい。遺物についてはそれぞれ専門の諸家に自由に研究を嘱託しながら、正式の報告にあたつてはその要領を得て遺跡の年代観についてもほぼ正鵠を得るものが多い。遺物の大部分はそのよき協力者アンドルーズ氏 (F. H. Andrews) によつて整理をへているが、その報告をみると採集した土器や陶器の一片にいたるまで深い愛情がそそがれていることがうかがわれる。

玄奘、マルコ・ポーロ、アレキサンダーの道はまた彼の歩いた道である。この乾燥アジアのほぼ大部分にわたる彼の調査は今後も基礎的な役割をうしなわないであらう。

いまや新疆省は必ずしも Terra Incognita ではない。又パキスタン (旧英領インドの西北部) よりアフガニスタン・イラン・イラクも中東の一國として、新たな動向を示している。二十世紀初頭の各国の探検時代は完全に過去のものであり、それぞれの地域の考古学的調査はその地域の新たな開発と民族意識の高揚という問題とふかくむすびついているやうにおもわれる。しかしかかるひろい全域の調査にわたつて生涯をささげたヘディンやスタインの業績は不朽であり、その成果はこの地域の研究者にとつて先づ眼を通すべき一つの巨大な作品といわねばならぬ。(昭和三十年九月十日)